官能の帝国

川﨑昌平
Kawasaki Shohei

生きていると、しばしば美に出会う。求めた上での出会いではない。なんとなし、人様に極力迷惑かけぬよう、のんびりと生きているつもりではあるが、どうしてか、ふとした瞬間、美に遭遇してしまう。突如現れた美は、息の長い、穏やかな思考の素材となって、僕を愉しませる。偶然の美は優しい手つきで、歪で濁った僕の目を、清浄にしてくれる。嬉しい。娯楽や発見をお金で贖わない身分としては、美が、無償の教科書になる。案外、悪くない生き方ではないかとこの頃思う。

この原稿はそうした偶然の美を、メモしたものである。努力して勝ち取った美ではないため、誰かに自慢したいとは考えないが、僕自身の思考をまとめるために、あるいはもっと単純に、ずっと未来において、忘れてしまわないために、書き残すことにした。過去の感動を、そこから学んだ幾つかの記憶を、少しでも長く抱えて生きていたいという欲望の結晶、かもしれない。社会と、そこにいる人々へのささやかな感謝、もう一つはマシになった自分の目が、再び劣化する未来を、僅かでも遅らせるための努力、二つの目的で筆を執る。擱く日は、ない。

鶴

ネットカフェの、オープンスペースと呼ばれる一画を好む。個室化されていないその空間は、単なるカフェと構造的にはさほど変わらない。談話談笑が聞こえないのと、電源確保の自由な点が、ファミレスや喫茶店と異なるところである。ドヤの代替物としてではなく、創作の寄る辺、アトリエとしてネットカフェを利用する身としてはテーブルと椅子と灰皿ぐらいがあればよく、個室の狭隘な空気は、糊に障る。かえって集中できない。適度に静かな他人が視界に蠢く空気こそ、肌にあう。

先日も、秋葉原のあるネットカフェ、高いビルの最上階、見晴らしがよいオープンスペースで夜を徹した。発表する予定もない自称超大作の草稿を練るためである。夜半、肩が痛くなり、目が疲れる。ソファーに身体を沈め、大きく手など伸ばしてみる。ふと、隣の席にいる人間に気が付いた。

女性である。年の頃はわからない。僕と同い年にも思えるし、若くも見える。黒く長い髪を左右に束ね、背を曲げて、机に覆いかぶさるようにして、漫画を読んでいる。おそらく週刊誌、厚さからして青年誌、ヤングジャンプとか、そんなようなものかしら。一心不乱、青い分厚いフレームのメガネの奥、細長い目は眼光鋭く、薄い唇は硬く結ばれ、顔は紙面からピタリとも動かない。

どころか、よくよくじっと観察してみれば、ページも動いていない。雑誌自体は小刻みに、慎重に、カサカサと動いてはいるが、ページが繰られない。女性、何をしているのか、肩をいからせ、細い手首の先だけを滑らかに動かしている。

漫画を読む人間の醸し出す空気ではない。集中の気炎はあっても、平穏の呼吸がない。どうにも興味津々、無礼を承知で、首を伸ばして女性の手元を覗こうとする。女性、僕を気にも留めず、作業に没入、僕も遠慮なく堂々観察した。

花があった。花弁が凛々しく咲き誇っている。女性は雑誌のグラビアページを、折ったり曲げたり傾けたりしつつ、花を育てていたのである。やがて、花が翼に変わった。花弁と見たのは、僕の早計で、実は羽撃く鳥の大きな翼であった。それは誰もが目にしたことのある形、鶴となった。折り紙の鶴である。舌を巻いた。美しい鶴が真っ直ぐに羽根を広げている。

グラビアページを選んで折ったことを褒めるつもりはない。そんなことはどうでもよい。まずなによりも単純に驚かされたのは、伎倆である。女性はページを破ったり、裂いたりして、鶴を成したのではない。綴じられたページそのまま、器用に薄い光沢のある紙を操り、ページの上に鶴を産み落としたのである。したがって、鶴とページは物質的には継続している。断裂はない。歪められたグラビアアイドルの微笑が、そのまま鶴の翼や尾へと延伸する。屈折させられた色彩の中に、鶴は静かに端座している。紙片を鶴に変化させるのは誰でも出来る。だが、紙に鶴を浮かび上がらせる技は、一体この世の何人ぐらいが習熟しているものなのだろう？

ネットカフェの雑誌を勝手にそのような扱い方で玩ぶ是非はさておくとして、僕は与えられた新鮮な驚愕に感謝し、感謝のみでは気が済まず、普通は滅多にそんな真似しないけれども、女性に声などかけてしまった。

「器用ですね」

と言えば、女性、じっとできあがった鶴を見たまま、

「鶴を折るの、得意なんです」

と答えてくれた。僕の凝視は先刻承知のようで、声をかけられるのを待っていたのか、女性は頼みもしないのに勝手に語り出す。

「気が付くと鶴を折っちゃうんです。割り箸の袋とかにもやっちゃうんです。トイレットペーパーにも折ったこと、あります」

「いつもこんな風に？　つまりその、紙の中に鶴を折るという……」

「そうです。このやりかた、あたしが発明したんです」

その真偽はさておくとしても、女性の天才は疑いの余地がない。平日の深夜、黙々と一人、紙という屈強なメディアへ、勇躍果敢、鶴を飛翔させてみせるのである。粋だ。表参道あたりを潜ました顔でさまよう連中に見せつけてやりたい、粋の具合、まったくおしゃれである。

僕はすっかり嬉しくなり、次いで女性の鶴を無性に欲しくなり、鞄から、翌日の打ち合わせ用に買っておいたいろがみ（トーナルカラー）を一枚、女性に手渡し懇願した。女性は眠たそうな目で僕を見て、それから「いいですよ」と応じてくれ、せっせせっせ。一〇分ほどで完成、僕は店員に「なんでもいいから空き箱下さい」と頼み、小ぶりな段ボール箱を頂戴し、鶴をそっとしまい、女性に深々頭を下げ、礼を言い、早朝、ネットカフェを去った。素敵なアーティストとの偶然の出会いが、僕の足取りを軽くした。まったく、幸福だ。

紙で鶴を折るのはたやすい。
紙に鶴を折るのは難しい。

see u 128 page...